

7/22 Fri.

第619回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.619 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
ピアノ
Piano
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

エトヴェシュ
EÖTVÖS

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

アレホ・ペレス *-p.5*
ALEJO PÉREZ

諏訪内晶子 *-p.6*
AKIKO SUWANAI

エフゲニ・ボジャノフ *-p.6*
EVGENI BOZHANOV

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

セイレーンの歌 (日本初演) [約12分] *-p.8*
Sirens' Song (Japan Premiere)

ヴァイオリンとピアノのための協奏曲
二短調 [約37分] *-p.9*
Concerto for Violin and Piano in D minor (full orchestra version)
I. Allegro
II. Adagio
III. Allegro molto

交響曲 第12番 二短調 作品112 〈1917年〉
[約38分] *-p.10*

Symphony No. 12 in D minor, op. 112 "The Year of 1917"
I. 革命のペトログラード
II. ラズリーフ
III. アヴローラ
IV. 人類の夜明け

7/26 Tue.

第653回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.653 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ギター
Guitar
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ロッシーニ
ROSSINI

ロドリゴ
RODRIGO

[休憩]
[Intermission]

サン＝サーンス
SAINT-SAËNS

アレホ・ペレス *-p.5*
ALEJO PÉREZ

村治佳織 *-p.7*
KAORI MURAJI

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

歌劇〈泥棒かささぎ〉序曲 [約10分] *-p.13*
"La gazza ladra" Overture

アランフェス協奏曲 [約21分] *-p.14*
Concierto de Aranjuez

I. Allegro con spirito
II. Adagio
III. Allegro gentile

交響曲 第3番 ハ短調 作品78 〈オルガン付き〉
[約36分] *-p.15*

Symphony No. 3 in C minor, op. 78 "Organ Symphony"
I. Adagio — Allegro moderato — Poco adagio
II. Scherzo : Allegro moderato — Presto — Maestoso — Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

指揮

アレホ・ペレス

ALEJO PÉREZ, Conductor

ザルツブルク音楽祭
などで活躍し、欧州で
注目を浴びる俊英



©Karim-Khawatmi

7/22
定期

7/26
名曲

Maestro

確かな様式感と複雑なスコアも完璧に汲み取る能力で、コンサートとオペラの両分野で際立った存在感を見せ、国際的に活躍するアルゼンチンの俊英。

ブエノスアイレスで作曲と指揮を学び、その後ペーテル・エトヴェシュのアシスタントを務めた。2009年から12年までアルゼンチンの名門、テアトロ・ラプラタの音楽監督として〈ドン・カルロ〉〈ファウストの劫罰〉〈トリスタンとイゾルデ〉などを指揮。マドリード王立歌劇場には定期的に客演し、リヨン歌劇場では〈ペレアスとメリザンド〉などを指揮し、高い評価を得た。パリ・オペラ座、ローマ歌劇場、ライプツィヒ歌劇場など客演多数。15年に〈ウェルテル〉でザルツブルク音楽祭にデビューし、16年に再招聘され〈ファウスト〉(新制作)でウィーン・フィルを指揮し、その様子はDVDで発売されるなど話題を呼んだ。19年からはベルギー王立フランダース歌劇場の音楽監督を務めている。近年はドレスデン国立歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場、シカゴ・リリック・オペラなどで活躍するほか、今年4月に〈カルメン〉でウィーン国立歌劇場にデビューするなど、オペラ指揮者として目覚ましい活躍を続けている。

コンサートでは、フランス放送フィル、ベルリン・ドイツ響、スイス・ロマンド管、フィルハーモニア管、アンサンブル・モデルンなどを指揮。読響とは、18年の東京二期会の〈魔弾の射手〉にて初共演し、好評を博した。読響主催公演には初登場。趣味は世界各地の砂時計を集めること。

7/22
定期

Artist



©Takaki Kurnada

ヴァイオリン

諏訪内晶子

AKIKO SUWANAI, Violin

世界の檜舞台で活躍する、日本を代表するヴァイオリニスト。1990年、史上最年少でチャイコフスキー国際コンクールで優勝。これまでにサヴァリッシュ、スクロヴァチェフスキ、マゼール、メータ、ゲルギエフらの指揮で、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管、ベルリン・フィルなど国内外の主要オーケストラと共演。BBCプロムス、ルツェルン等の国際音楽祭にも多数出演。幅広いレパートリーを持ち、近現代作品の演奏にも定評がある。2012年より「国際音楽祭NIPPON」を企画制作し、同音楽祭の芸術監督を務めている。使用楽器は、日本にルーツをもつ米国在住のDr. Ryuji Uenoより長期貸与された1732年製作のガールネリ・デル・ジェズ「チャールズ・リード」。読響とはたびたび共演を重ねている。

7/22
定期

Artist

独創性を持ち、強烈な個性を放つブルガリアの異才。2008年リヒテル国際コンクール優勝。10年エリザベート王妃国際コンクール第2位、同年ショパン国際コンクールにて第4位に入賞し、アルゲリッチから唯一称賛の拍手を贈られて一躍注目を浴びた。ヴァルチュハ、ソヒエフ、ルスティオーニら名匠の指揮で、ベルリン・ドイツ響、スウェーデン放送響、RAI国立響、ラハティ響、サンタ・チェチーリア管などの名門楽団と共演。ワルシャワのショパン・フェスティバルにたびたび招かれるほか、ベルリン・フィルハーモニーホール、ウィーン楽友協会など世界の主要なホールで演奏。20年よりドイツの名門フォルクヴァンク芸術大学の教授に就任し、後進の指導育成にも力を入れている。読響初登場。



©Marco Borggreve

ピアノ

エフゲニ・ボジャノフ

EVGENI BOZHANOV, Piano



©Kazumi Kiuchi

ギター

村治佳織

KAORI MURAJI, Guitar

卓越した技巧と音楽性を持ち世界的に活躍するクラシック・ギタリスト。15歳でCDデビューを飾り、フランス留学から帰国後、積極的なソロ活動を展開。国内および欧州のオーケストラと共演を重ね、2003年英国の名門クラシックレーベルDECCAと日本人としては初の長期専属契約を結ぶ。NHK-Eテレ「テレビでフランス語」、テレビ朝日「題名のない音楽会」「徹子の部屋」などメディアへの出演も多い。17年4月からJ-WAVE「RINREI CLASSY LIVING」のナビゲーターを4年間務めた。出光音楽賞、村松賞、ホテルオークラ音楽賞、ベストドレッサー賞（学術・文化部門）など受賞多数。読響とは、04年にスペインの名匠、フリーベック・デ・ブルゴス（元読響名誉指揮者）指揮の《定期演奏会》のほか、数多く共演している。

7/26
名曲

Artist

エトヴェシュ

〈セイレーンの歌〉(日本初演)

ハンガリー生まれの作曲家ペーテル・エトヴェシュ（1944～）は、どこか昔気質^{かたぎ}の経歴をたどる音楽家だ。リスト音楽院で作曲を学んだのは確かに近代的ではあるが、在学中の1962年からコミック劇場の音楽監督を務め、舞台や映画、テレビ番組の音楽、いわゆる劇伴を数多く作曲した。叩き上げの音楽家像がうかがえる。

1966年からはドイツ学術交流会の支援を受けてケルンへ。そこでシュトックハウゼンと共同作業^{いそ}に勤しんだ。作曲を師事するのはもちろんのこと、演奏家としても師の音楽作りに参与する。いくつかの録音にも加わった。

フランスの現代音楽演奏集団アンサンブル・アンテルコンタンポランの指揮者になったのが1979年。作曲と演奏とで今なお、同時代音楽の先頭集団を走る。

エトヴェシュは2020年に、オーケストラのための〈セイレーンの歌〉を書き上げた。作曲家はホメロスの『オデュッセイア』、ジョイスの『ユリシーズ』に触発されて作品を着想したという。とりわけ、カフカの『セイレーンの沈黙』からエッセンスを吸収したらしい。

ホメロス版で怪鳥セイレーンは、歌でオデュッセウス（惑わされたくないが歌は聴きたいので耳栓をしていない）を誘惑する。カフカ版は内容を異にする。セイレーンは歌わない。オデュッセウスは耳栓をしている。彼はセイレーンの仕草を観察することで、怪鳥が歌っていると思い込む。エトヴェシュはこのセイレーンの沈黙に注目した。オデュッセウスはセイレーンの歌はおろか、その沈黙も聞こえない。ただ見ている。我々は音楽を見ているのか、聴いているのか。

冒頭、点描的だったサウンドはその後、徐々に方向を持ち始める。やがて持続音が何かを覆うように響く。低音部に始まった震える音が、高音部へと伝染していく。音楽はいつか方向性を取り戻す。

重心の高い音響によって霧散した方向性が、大きな休符を経て、震える音とともに戻ってくる。やがて音楽は“すり足”で消えていく。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2020年／初演：2021年3月25日、ハンガリー・ペーチ／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、打楽器（グロッケンシュピール、トライアングル、クロティル、ヴィブラスラップ、ヴィブラフォン、スレイベル、銅鑼）、弦五部

メンデルスゾーン

ヴァイオリンとピアノのための協奏曲 二短調

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）はハンプルク生まれ。まもなくベルリンに移住する。基礎教育は父親が、芸術の基本は母親が授けた。しばらくしてピアノの指導は母親から当代一の演奏家ベルガーに引き継がれる。学校には行かず、もっぱら家庭で超一流の教育を受けた。これが早熟の天才の第1期。

第2期は19年から。音楽理論や作曲を、ベルリン楽壇の重鎮ツェルターについて学ぶ。ここからすぐに本格的な作曲に取り組んだ。ツェルターとともに21年以降、大詩人ゲーテの下をしばしば訪ねる。それからメンデルスゾーンの創作エンジンに、いっそう勢いが増した。第3期である。

少年作曲家の父親は、息子を連れて旅に出ることを忘れなかった。グランドツアーだ。この旅行後の第4期にメンデルスゾーンは、大規模な器楽曲に積極的に挑戦するようになる。

この第4期を締めくくる作品が、ヴァイオリンとピアノのための協奏曲二短調である。23年5月6日に脱稿。スイス旅行から帰った後、ベルリンで書き上げた。

第1楽章、冒頭主題にすでに作曲家の非凡さが見える。順次上行して完全5度跳躍下行する「ラシミ」（階名、以下同様）と、そのオクターブ上で完全5度音程を順次下行する「ミレドシラ」とが呼応する。「ラーミ」間を動く、性格の異なる2つの動機を、音域を変えて対置し、結合しているのだ。独奏陣の細やかなアンサンブルが始まって、その奥に響く第1主題の陰しい表情。そうした各要素をポリフォニックに束ねていくところに、青年の気負いが感じられる。

第2楽章では順次下行音型を移旋（長調化）して主題とする。**第3楽章**はまた短調だが、今度は順次下行音型を上行に変えて勢いをつける。途中、讃美歌風の楽句が耳をひく。独奏陣がその旋律を巡って丁々発止のやりとり。やがて始めのテンポに戻り、順次上行音型を強調して作品を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1823年5月6日／初演：1823年7月3日、ベルリン／演奏時間：約37分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第12番 二短調 作品112 (1917年)

1953年、スターリンが死んだ。ソヴィエト連邦の政治指導部の姿勢にも変化が生じる。徐々にだが「自由」化が進んでいった。それはアートの創作環境にも波及する。

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906～75) もまた、この「自由」を享受した者のひとり。この年、交響曲第9番から8年を経て、とうとう第10番を発表したのだ。自らの名前を示す音型を作品にちりばめて、「解放」された自分を表現している (のかもしれない)。

この作品はしかし、守旧派と進歩派との間に激しい議論を引き起こす。第10番を、前者は「非写實的」だと非難し、後者は「楽観的な悲劇」として擁護した。この「楽観的」なスローガンで後者が論争に勝利したところに、当時の「自由」化への偏りぶりが炙り出されている。

興味深いのはショスタコーヴィチが、この「自由」を早くも手放してしまうことだ。つまり作曲家は、続く第11・12交響曲で、自らの交響曲創作史上、もっとも体制に迎合する。

ショスタコーヴィチは1957年、ロシア革命40周年の記念に、交響曲第11番 (1905年) を書き上げた。これは失敗に終わった05年の「ロシア第1革命」に取材している。

作曲家は各楽章に史実にちなむ副題をつけ、革命歌の旋律を素材として使った。重要なのはこれらの旋律を単なる引用に終わらせず、交響曲の構成要素として作品に統合したことだ。

1961年には「レーニンの思い出に」と添書きした交響曲第12番を作曲、初演した。別名を (1917年) とすることからも明らかなように、この作品は同年のロシア革命、とりわけレーニンの主唱・主導した「四月テーゼ」および「十月革命」をその題材とする。

ロシア革新勢力は1917年の「二月革命」によってロマノフ朝を崩壊させた。その時点で大勢は、これをブルジョワ革命と見なした。

流刑地からペトログラード (現サンクトペテルブルク) に帰ったレーニンは、それに対して「革命におけるプロレタリアートの任務について」を発表し、ブルジョワ階級からなる臨時政府を認めないことを明確にする。

その考えに支持が集まるようになった結果、レーニンらは同年10月10日、武装蜂起による権力奪取の方針を決める。軍各部隊がこの方針に賛意を示し合流したことで、レーニンはとうとう臨時政府を打ち倒した。「十月革命」である。

第12番はこうした事績を下敷きにする。第11番同様、4つの楽章は切れ目なく続き、それぞれに革命に由来する副題がついている。

第1楽章「革命のペトログラード」 序奏の冒頭に低弦が、二音から5音半上の変二音へとジグザクに上っては、そこからなだらかに下っていく旋律を変拍子で奏でる。これが第1楽章はもちろん、全曲を束ねるかすがいとなる。序奏に現れる長短短 (タータタ) リズムの動機は、革命歌〈憎しみの^{もつぽ} 罅〉を引用したもの。ソナタ形式の主部 (アレグロ) がその序奏に続く。

第2楽章「ラズリーフ」 古典的な交響曲同様、緩徐楽章。副題はペトログラード近郊の湖の名前から。レーニンは1917年4月、ラズリーフ湖畔で革命の計画を練ったとされる。第1楽章の旋律に見られた順次進行とジグザグ進行とを組み合わせ、冒頭の弦楽の主題とする。その上で管楽器群が、取り合わせを変えながら登場する。

第3楽章「アヴローラ」 臨時政府の入る冬宮を巡洋艦アヴローラが砲撃し、「十月革命」の火蓋を切って落としたとする伝説に基づく。ティンパニの短長打ち (タター、タター) に、徐々に他パートが合流していく。うごめく弦楽の上で、管楽器が (ショスタコーヴィチ風の) コラルを奏でる。やがて、ティンパニが改めて短長を刻み、他パートが再びそこに合流する。

第4楽章「人類の夜明け」 第1楽章序奏の旋律 (ジグザグ) に第3楽章の短長リズムを組み込んだファンファーレが、「夜明け」を表現するかのようだ。その後、蛇行する旋律を管・弦で受け渡しつつ進み、各パートが合流していく。総休止を挟んで〈憎しみの罅〉の主題を呼び戻し、賑々しく作品を閉じる。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1961年／初演：1961年10月1日、レニングラード／演奏時間：約38分

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼)、弦五部

ロッシーニ

歌劇〈泥棒かささぎ〉序曲

イタリアの作曲家ジョアキーノ・ロッシーニ（1792～1868）がミラノ・スカラ座からの依頼にこたえて1817年に作曲したのがオペラ〈泥棒かささぎ〉。20年間に39作ものオペラを作曲したロッシーニにとって21作目にあたる。

物語の鍵となるのは銀の食器。小間使いの娘が銀の食器を盗んだ疑いをかけられる。娘に横恋慕する代官は、使用人の窃盗は死刑だと言する一方、自分の愛を受け入れるなら助けてやろうと言い寄る。娘は代官を拒み、いよいよ死刑台へと向かうところで、かささが隠していた銀の食器が発見され、娘の潔白が証明されてハッピーエンドを迎える。

かささはカラス科の鳥で、日本では佐賀県などごく一部で観察され、その生息地が天然記念物に指定されているが、ヨーロッパでは広域に生息する一般的な野鳥であり、古くから宝石など光るものを好んで集める習性を持つと伝えられている。そのためこのようなかささを泥棒役に仕立てたストーリーが成立するわけだが、近年のイギリスでの研究によればこの習性は俗説にすぎず、むしろ光るものを警戒するとされており、現実にはかささぎの潔白が証明されそうな情勢である。

ミラノ・スカラ座での初演は大成功を収め、ロッシーニは母親に宛てた手紙で「序曲から熱狂が始まるなど前代未聞」と記している。現代ではオペラ本編が上演される機会は決して多くないが、序曲はしばしばコンサートで演奏される人気曲となっている。テレビCMなどでの使用例も多い。

曲は堂々とした行進曲風の曲調で開始される。小太鼓の連打が処刑シーンを示唆して緊迫感を高める。焦燥感のある主題を経て、オーボエがひなびた主題を奏でる。「ロッシーニ・クレッシェンド」と呼ばれる息の長いクレッシェンドを交えながら、華やかで活発な終結部へと突き進む。

なお、本日の演奏ではグスタフ・フリードリッヒ・コーゲルによるブライトコプフ版が使用される。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1817年／初演：1817年5月31日、ミラノ・スカラ座／演奏時間：約10分

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓2、トライアングル）、弦五部

ロドリゴ アランフェス協奏曲

ホアキン・ロドリゴ（1901～99）はスペイン東部の町サグント生まれの作曲家。幼少時に視力を失っている。36年から39年にかけてのスペイン内戦時はパリとドイツに住み、39年に帰国するとマドリードを拠点に活動し、翌40年に〈アランフェス協奏曲〉を発表した。ギターの奏法について知識の乏しかったロドリゴは、作曲にあたってマドリード王立音楽院教授を務めたギタリスト、レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサから助力を得ている。デ・ラ・マーサの独奏による初演は大きな成功を収め、以降、20世紀を代表するギター協奏曲として愛奏されている。

曲名のアランフェスとはマドリード州南部の緑豊かな景勝地で、スペイン王宮の離宮や庭園で知られる。ロドリゴは若き日に夫人とともにこの土地を訪れており、その思い出に触発されて作品が書かれた。アランフェスの歴史に思いを馳せながら、「貴族的な要素と民衆的な要素がひとつに溶け合っていたスペインの面影を作品に描こうとした」と作曲家は語っている。

第1楽章 アレグロ・コン・スピーリト 軽快で活発なリズムが一貫する。浮き立つような楽想にスペイン情緒が醸し出される。

第2楽章 アダージョ イングリッシュ・ホルンによる切なく甘美な旋律はあまりに有名。〈恋のアランフェス〉〈わが心のアランフェス〉などの題でポピュラー音楽の分野でも数多くカバーされている。後年、作曲者が明かしたところによれば、このアダージョにはアランフェスを訪れた当時、最初の子を流産して間もなかった夫人への慰めが込められているという。

第3楽章 アレグロ・ジェンティーレ 4分の2拍子と4分の3拍子を交替させながら朗らかな楽想がくりひろげられる。宮廷風の古雅な趣が漂う。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1939年／初演：1940年11月9日、バルセロナ／演奏時間：約21分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦五部、独奏ギター

サン＝サーンス

交響曲 第3番 八短調 作品78〈オルガン付き〉

「モーツァルト以来の神童」といえば、フランスの作曲家カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）。3歳の誕生日を迎えてまもなく最初のピアノ曲を作曲したという。10歳にしてベートーヴェンとモーツァルトのピアノ協奏曲を弾いてコンサートホールにデビューを果たした際は、アンコールに「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲からどれでも一曲を暗譜で演奏しましょう」と申し出た。

そんなサン＝サーンスが早くから交響曲の創作を手がけたことは不思議ではないだろう。古典派交響曲の様式を学び、まずは15歳で交響曲イ長調を作曲する。18歳になると交響曲第1番変ホ長調作品2を発表して注目を浴びた。指揮者はこの曲を「無名のドイツ人作曲家による作品」としてとりあげ、公演後に真の作者を公表して人々を大いに驚かせた。フランスにおける有望な交響曲作曲家の誕生だ。続いてサン＝サーンスは1856年に交響曲ヘ長調〈ローマ〉、1859年に交響曲第2番イ短調を作曲する。ただし決定的な傑作が誕生するのは、それから四半世紀以上を経て、作曲者が真の成熟を迎えてからのことになる。

1885年、ロンドン・フィルハーモニック協会は翌シーズン用に新たな管弦楽曲をサン＝サーンスに委嘱する。初演の会場はセント・ジェームズ・ホール。オルガニストでもあったサン＝サーンスはこの会場のオルガンを過去に演奏したことがあり、その経験は新作の構想に大いに影響したにちがいない。交響曲第3番ではオーケストラにオルガン、4手連弾のピアノを加えた異例の楽器編成が採用され、きわめて豊麗で精彩に富んだ音響が生み出されることになった。作曲者は「自分の与える限りのすべてがこの曲に込められている……だからこのような作品を二度と書くことはないだろう」と自負している。

1886年のロンドンでの初演は大成を収め、翌87年1月のパリ初演でも聴衆はまれに見る熱狂ぶりだったという。このときフォーレはサン＝サーンスに宛てて「私がどれほど楽しませてもらったか、あなたは想像もつかないことでしょう。私たちの年齢を合わせたよりも長く生きながらえるにちがいない交響曲を、一音たりとも聴きもらすことがありませんでした」と記している。

同じくパリ初演に感銘を受けたグノーはサン＝サーンスを「フランスのベートー

ヴェン」と讃えた。グノーの真意はともかく、この交響曲が「苦悩から勝利へ」「ハ短調からハ長調へ」というベートーヴェン流のドラマで貫かれていることはまちがいない。出版順に従って「第3番」の番号が付されているが、前述の交響曲イ長調と「ローマ」を含めれば、これは作曲者にとって5番目の交響曲。そう考えれば、この曲はサン＝サーンス版「運命交響曲」ともみなせるかもしれない。

曲は2つの楽章からなり、さらにそれぞれが前後半の2部から構成される。全体として見れば古典的な4楽章構成が保たれている。サン＝サーンスは前半と後半をそれぞれ一つの楽章とすることで、「際限のない再現や繰り返しを避けようとした」と記している。

第1楽章前半 アダージョ～アレグロ・モデラート ワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉前奏曲を連想させるような官能的な序奏で開始され、弦楽器によるさざめくような主題が続く。

第1楽章後半 ポコ・アダージョ 緩徐楽章に相当する部分で、オルガンを伴って弦楽器が幻想的な主題を奏でる。

第2楽章前半 アレグロ・モデラート～プレスト 鋭くエネルギッシュな主題によるスケルツォ風の音楽。

第2楽章後半 マエストーソ～アレグロ 荘厳なオルガンの強奏によって導かれるフィナーレ。4手ピアノも加わり、第1楽章の主題を変形して回帰させながら、壮麗なクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1886年／初演：1886年5月19日、ロンドン／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル）、4手ピアノ、パイプオルガン、弦五部